



営農NEWS



トマト黄化葉巻病の防除は 育苗中から 栽培後まで 常に徹底しましょう

トマト黄化葉巻病は、全国のトマト産地で難防除病害虫として、深刻な問題となっています。その対策としては、黄化葉巻病ウイルスの媒介虫となるタバココナジラミ・バイオタイプQを、トマトの育苗～栽培後まで ①施設に侵入させない、②施設内で増殖させない、③生きたまま施設外に逃がさないことが重要で、媒介虫の発生に十分注意して防除を徹底する必要があります。さらに、発病株が確認されたら早急に抜き取って施設外に持ち出し、土中深く埋めるか、ビニール袋内で腐熟させるなど、適切に処分して伝染源の撲滅に努めましょう。これら基本の防除技術を各生産者が連携して、これまで以上に一層真剣に取り組むことにより、被害の拡大阻止と封じ込めを図って、難防除病害虫の克服を進めてください。

[黄化葉巻病の総合防除]

ウイルスを媒介するタバココナジラミ類の基本防除として、媒介虫を①施設に入れない ②そこで増殖させない ③栽培終了後も生きたまま施設から逃さないことが重要です。

①の施設に入れない対策としては、出入口や天窓・側窓など施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm）を設置します。特に、育苗場所の出入口には前室を設け、二重に防虫ネットを展張するなど、厳重な遮断が必要となります。

また、害虫の飛来源、ウイルス保毒源となる雑草や野良生えトマトなどがあれば、常に抜き取りや除草を徹底してください。

なお、施設には必要のない鑑賞作物を入れないことが重要で、これらの作物に病害虫が潜んでいる危険性があります。

次に、②の増殖させない対策としては、定植時に殺虫剤（ベストガード粒剤やスタークル顆粒水溶剤）などを処理し、栽培中は常に作物を注意深く観察して早期発見に努め、早期の薬剤防除や発病株の適切な処分を行います。

また、施設内に黄色の粘着トラップなどを設置してコナジラミ類を誘引し、密度の抑制を図るとともに薬剤防除を行う時期の参考にします。散布薬剤は下記を参考に、トマトの作期全般における総使用回数（粒剤等も含めて）を考慮して選択し、寄生の多い葉裏にも薬液が十分かかるよう下方からも吹き上げて丁寧に散布します。また、抵抗性害虫の出現を防ぐため、ローテーション防除を行いましょう。

さらに、栽培が終了したら ③施設内のタバココナジラミ類が逃げ出す前に、蒸し込み処理などで死滅させて、施設周辺の密度低下を図ることが必要です。タバココナジラミ類は飛翔しますので、圃場周辺を含め、地域全体での共同防除が特に重要になります。

表1 トマト、ミニトマトにおけるコナジラミ類の主な防除薬剤（平成26年1月14日現在）

薬 剤 名	対象作物		使用量または希釈倍数	使用時期 / 使用回数
	トマト	ミニトマト		
ベストガード粒剤	○	○	1～2g/株 株元処理 または	育苗期/1回 または 定植時/1回
	○	○	1～2g/株 植穴処理土壌混和	
スタークル顆粒水溶剤	○	○	100倍 育苗トレイ等への灌注※	定植時/1回 収穫前日まで/2回以内
	○	○	2,000～3,000倍	
アニキ乳剤	○	○	1,000～2,000倍	収穫前日まで/3回以内
サンマイトフロアブル	○	○	1,000～1,500倍	収穫前日まで/2回以内
ディアナSC	○	○	2,500倍	収穫前日まで/2回以内
コルト顆粒水和剤	○	○	4,000倍	収穫前日まで/3回以内
ハチハチフロアブル	○	○	1,000倍	収穫前日まで/2回以内
コロマイト乳剤	○	○	1,500倍	収穫前日まで/2回以内

注) ※印は、セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ）当たり0.5ℓ灌注を略しました。

農薬を使用する際には、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040